DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止
AgentGame

Palette Enterprise.

政府の求めに応じて深山から降り、エージェントとなった退魔の巫女御門静音。その初戦となるべき戦いは生物ラボで発生した淫魔ハザードの対処であった。淫魔化した馬や牛があふれる研究所に単身織り込んでいく。静音も神道退魔流の術を尽くして闘ったがまだ実戦経験の薄い巫女にとっては荷が重すぎる任務であった。

闘いやすいよう身体に密着するよう改造された純白と漆黒で彩られた改造巫女装束ごと淫裂を濡れてもいないのに淫魔馬の超極太で触手でぶち抜かれた。

「んおおおおおおっっ!!」

しかし静音の纏う神気でも中和できない淫気のおかげで感じたのは痛みではなくて壮絶な快楽でった。腹をスーツごと突き上げられる度に壮絶な快感が全身をバラバラに粉砕するほどの勢いで駆け抜けていく。更に媚毒射精まで喰らって胎内をパンパンにされて絶頂する。退魔エージェントの巫女は完全に敗北した――

馬淫魔に犯され抜いて戦闘能力を失った巫女エージェントの次なる相手は、淫魔化した牛であった。その体躯は異様なまでに巨大で、一軒家の屋根程までは身長がある。

触手逸物も股それに似合った超極太で、静音の胴体ほどはあろうかという大きさであった。

触手で細い胴を鷲づかみにし、その超弩級極太触手を無理矢理小さなおまんこに埋め込んでいく。その様はまるでオナホールを使っているようであった。

「おごぉおおおお――っっっっ゛゛さっけ、さけるぅぅっっ゛゛　儂の身体真っ二つになるぅぅうっっっ゛゛」

そして身体ごと上下に揺すぶられる。その度に極太逸物が腹を突き破らんがばかりに子宮内壁を押し上げ、漆黒の巫女スーツごとお腹が胸元まで突き上げられる。

そんな責めでも感じてしまい、おぞましい淫拷問絶頂に身を震わす。巫女少女の初陣は陰惨な結果に終わろうとしていた。

身体に貼り付き豊満なボディラインを露わにする漆黒のライダースーツに身を包んだ黒髪の美女エージェント、朱鷺羽瑞穂。彼女は愛車の大型バイクを駆って各所に同時発生した淫魔を退治していたが、ふとした油断から濃厚な淫気にまとわりつかれ愛車が淫魔とかしてしまった。触手と化したバイクのタイヤが乳首にはまり、勃起を強制してくる。まもなく乳突起はビンビンにそそり立ち、淫液にまみれたタイヤで乳首をなぞられる感触だけで絶頂するほどになる。

さらに股間には大型のスパイクタイヤを思わせるようなタイヤ触手がぶち込まれていた。膣内を高速回転で抉りながら。子宮内部をも擦り上げる。

「あおおおおっっっ三　おおおっっ三」

成熟した大人の女性だけが持つ濃密な色気を振りまき、黒髪を振り乱してイキまくる瑞穂。歴戦のエージェントである彼女であっても耐えがたいほどの壮絶な快美感と絶頂の前に、なすすべも無くメスに変えられていた。

完全にグロッキーになった瑞穂はもう淫魔バイクの思うがままだ。ライダースーツの美女エージェントはバイクの座面に跨がらされた。シートにはピストンを模したような彼女の頭ほどはある超極太触手が生えており、当然それを飲み込まされるハメになった。形状通り強烈なピストンで子宮を抉られ、背も折れよと身体をのけぞらせて発情汗を振りまきながら絶頂する瑞穂。

淫魔バイクはなんとそのまま荒れた路面を走行しだしたのである。

「んひっっ ⁝⁝ ひぃぃぃっっっ ⁝⁝」

右に左に車体が傾き、段差を乗り上げたりする度に膣や子宮の思いも掛けないところが抉られてその度に予測できない絶頂が襲いかかってくる。

かといってこの高速で走っている淫魔バイクから振り落とされては死は免れまい。滑稽だとわかっていてもハンドルを握らざるを得なかった。死の恐怖と隣り合わせに送り込まれてくる快美感は股格別で、ダメだとわかっていても絶頂してしまう。淫らなツーリングは燃料が尽きるまで続く——。

東京都のとなりに、一つの県を丸々学園研究都市に改革した地域があった。その名も『中央研究学都ヘキサゴン』。その名の通り土地の形は六角形になっており。その頂点部に日本を代表する会社の生物学、工学、物理学といった研究所の摩天楼のようなビルが林立し、中央に巨大な学園都市『五角市』が築かれている、という特殊な都市であった。この年で生み出される発明、特許は毎年数千件にも上り、まさに日本の頭脳の中枢とも言えた。

時を同じくして日本は異次元から現れる謎の生命体、『淫魔』の存在に頭を悩ませていた。無差別な破壊活動、女性を犯し生命力を奪い取るという残虐さ、そして高位の物には人間に食い込んで利益――あるいは何らかの目的――を達成しようとする物すらいた。もちろん政府も手をこまねいていたわけではない。警察、公安調査庁、防衛省などが躍起になって日々退治に明け暮れ、高位淫魔の陰謀を暴こうとしている。そんな組織の中に特に高度な隠密性を要求された部署が設立された。その名も『内閣府特殊生物災害対策室』、通称Ｉ機関。ここに所属するのは大半が秘密工作活動に従事するいわゆるスパイの役目を担っていた。各研究所に潜り込み、淫魔と人間との癒着を暴く、そんな危険で重要な任務に就いているのだ。表向きは通常の警察力では対処できない淫魔を殲滅するためのエージェントを置く部署となっており、その方面でも一流であった。

そんな隠密任務に就く彼女たちの危険な任務が、今始まる――。

目次

エージェント・鷹野瑠理　(挿絵：masa)　：4P-17p

エージェント・桃ノ木愛理　(挿絵：鈍色家電)　：18P-33P

エージェント・高坂真利愛 (挿絵きづかかずき)　：34p-39P

エージェント・御門静音　(挿絵：DON)　：40-P41P

エージェント・朱鷺羽瑞穂　(挿絵：トコビ)　：42P-43P

エージェント・榊百合亜　(挿絵：ズンダしぼん)　：44P-49P

奥付　：50P

小説：全て「高橋良喜」

表紙：masa

裏表紙；鈍色家電

古くから伝わる魔術師の家柄に産まれ、自らもまた高位の魔術師としてその世界でも名を知られた鷹野瑠璃が、今淫魔対策に躍起になっている日本政府に招聘されたのは当然の成り行きと言えた。齢17にして与えられたポストは『内閣府特殊生物災害対策室特別調査官』。淫魔犯罪に関するあらゆるアンダーカバーな対抗活動を行っていく組織であった。

瑠璃が着任してから大小いくつもの事件があり、その全てを裏面から密かに、そして鮮やかに解決している。

「……ふう」

ペンタゴンの一角を担う五見製薬研究所バイオラボ。

そこに彼女の姿があった。ＬＥＤ蛍光灯に照らされた彼女の顔はメガネの下のぱっちり開いた利発そうな目とスッと通った鼻筋、そして健康的なサーモンピンクに薄くリップクリームを塗ってきらめく唇を映し出している。どれをとっても美少女の及第点を平均を遙かに超えて満たしていた。

全身をピッタリと包むレオタード状のボディスーツに身をまとっているのだ。軽い光沢を放つ薄紫色のスーツは少女の首元から胴体はもちろん、両腕、両脚までをも隠していた。胴体には魔術の流れを示す蛍光色に薄く光るラインが無数に引かれている。足は黒く塗られた地下足袋のような、音を立てにくく地面を直接つかめるような構造になっている。両手には手の甲に大きな魔術刻印が彫られたメダルが取り付けられている。腰の後ろには二本の大ぶりなナイフが指されており、そのほかにも太股部分に投げナイフが何本も装着されている。

全身をあまりにもピッタリと覆うが故に瑠璃の魅惑的なボディラインが丸見えだった。レオタードに包まれてもなお自己主張激しく天を仰いでツンと上向く乳房は制服よりも締め付けが緩いせいかより一層大きく見える。そこから下に目をやればきゅっとくびれたＳ字ラインを描くウエスト、やや堅さが残る物の美しい曲線美を描き出すヒップがみてとれる。

特に乳房と股間にはサポーターのような物が無いのか、乳首のかすかな陰影がレオタードに浮いて見えているし、股は土手の膨らみまで丸見えだ。

そして下半身は鍛えられているのであろう引き締まって野生動物のようなしなやかさを感じさせる太股からふくらはぎ。

何処をとっても均整の取れた美しい肢体である。

彼女は今五角学園都市に蔓延する麻薬『レインボー』を追っていた。これをキメれば女はイ来っぱなしになって天国を見られ、男は絶倫になり何度でも射精の快感が味わえるというたい文句だ。この麻薬は依存性が非常に高く、一度でも使えば足抜けすることは難しい。そうなったジャンキーの行き着く先は年中イキっぱなしの色狂いか廃人である。それならまだいい方で、噂では淫魔に変貌してしまったという報告まである。

問題の麻薬を詳しく分析したところ。人間の科学力ではどうしても説明の付かない成分が混じっていることが判明した。間違いなく淫魔の分泌液から取られた成分が混入している。

その線から捜査を進めていった結果、一人の高位淫魔の存

在が浮き彫りになった。その名は『ゼロ』、数々の淫魔と人間が絡んだ犯罪に手を貸していると内閣府特殊生物災害対策室でも最重要指名手配している淫魔だ。

彼女は今、そのゼロと対峙していた。魔薬の生成を行っている研究所を突き止め、忍び込んだところ奴が居たのである。殺すわけにはいかない。こいつには聞きたいことが一杯有るのだ。だが。

(半殺しぐらいなら問題ないわよね！)

口の中で呪文を圧縮詠唱して威力を高めると、魔術メダルがはまった手袋をゼロに向けて突き出す。

「ガンドっ！」

人差し指から高度に圧縮された魔力の塊が発射され、ゼロめがけてとんだ。触手を引きちぎりながら。脇腹に命中する。外套の脇が破れ、大きく抉れた。そこから覗いた地肌は無数の触手の束によって構成されている。切断面から怪しげな粘液を吹き出しながらも、即座に新たな触手が空間を埋めていった。

「ぐっ……なかなかヤルじゃないか？　そんな小娘の牙を抜くのもまた楽しいものさ！」

(ガンドが効いてない!?)

ガントはだだの魔力ではなく呪いの一種である。まともに食らえば身動きすらとれないはずだ。しかし相手は平然としている。

そういうとゼロは先ほどよりも更に大量の触手を床を這うようにして放ってきた。その圧倒的な量は肉の洪水とでも呼ぶのがふさわしいほど。

それを高く跳躍し、空中でくるりと一回転して天井に張り付いた。魔術を乗せた足袋のようなブーツはしっかりと張り付いて落ちることはない。そこで再び

「ガンドっ！　ガンドっ！」

今度は二連射、威力も倍だ。術は狙い違わずゼロの両腕を引きちぎった。

だが相手は相変わらず蛙の面にしょんべんといった風で全く効いていないようだった。

「ボクの触手はね、アースの役割もしているんだ。魔術をマナにに変えて地面に逃がしてしまえるんだよ」

「くっ……」

瑠璃は歯ぎしりした。こうなったら危険だが賭に出るしかない。

(奴の身体に密着して。直接魔力を流し込むっ！)

そう決心した瑠璃は天井から一気に急降下し、腰に差していた魔術刻印入りナイフを抜いた。

圧縮愛称を唱え。稀薄の叫び共にナイフに込める。

「はぁぁぁぁぁぁぁぁっっっっっ!!!」

空から舞い降りるツバメの如くゼロの身体に飛びかかった瑠璃はナイフを脇腹に突き立てた。

レオタードに入った魔術ラインやナイフの魔術刻印がまばゆく光るほど魔力を送り込む。

「やっと、近くに来てくれたね。ここからは根比べだ。ボクが君の魔力に屈するか――君がボクの与える快楽に屈するか。レインボーはね、霊力や魔力の高い女性の愛液があると純度と効

果が増すんだ。君が負けたらレインボー精製のための愛液供給肉奴隷になってもらうよ……」

そう薄ら寒い事を言うと懐に飛び込んできた魔術師の少女を可愛がるべく触手を伸ばした。

「くっ……」

全力に近い魔力を乗せてナイフの柄を両手で握っているために身動きが取れない。なすがままにされるしかなかった。

まずネトネトした粘液がまぶされた触手がご挨拶に来た。レオタード越しに荷もロケット状に着き出した豊満な乳房に根元から巻き付いていく。

「!?」

その瞬間、じゅうっと皮膚を酸で焼かれるような熱さが乳肌に走った。

(!? 媚薬! まさか、この防護衣の魔力循環は完璧なはず……!)

魔力防壁が展開されて水一滴通さないはずの布地にあっさりと粘液が染みこんできたのだ。淫魔の魔力を越えた底知れぬ恐ろしさに戦慄するしかない。

「所詮科学も魔魔術も『人間の英知』にしか過ぎないさ。なら女を泣かせる淫魔がそれを乗り越えられたって不思議じゃないだろう?」

そういうとゼロの触手はぐっちゃぐっちゃといやらしい音を立てながら乳房を揉みこね始めた。あっという間に乳芯に媚薬が浸透し、燃えるように熱くなる。

巻き絞められる毎に張りを増す乳房は元々ロケット状だったおっぱいを砲弾状にまで捻り上げていく。

「くううう……!」

そうされると胸の中で切ない疼きが充満した。そのままぐにぐにとパン生地を揉み捏ねるように揉みまくられれば、口から

「あ、あはぁ……ぁ……」

と湿った吐息がこぼれだしてしまう。胸が蕩けそうなほどの悦感が早くもわき起こり、強く締め上げられて触手を食い込まされる度に悦びの疼きがどうしようもないほどにわき起こる。視界が一瞬フラッシュアウトしかけた。

さらにただの肉縄とは思えない程の巧妙さでねじり上げ、揉み込み、くびり出される。

「うあぁぁぁぁっっっっ……はぁぁぁぁぁぁ……」

体中の汗腺が開き。スーツの下でぶわっと仄香る玉のような汗が噴き出した。それはすぐに吸湿性に優れた布地に吸い取られて外に放出され、あたりに濃厚な牝香を漂わせていく。

「まだ揉んでいるだけだぞ、ずいぶんな喘ぎぶりだな。ナイフから手を放さないように気をつけろよ?」

そういって薄く笑う。

乳房の頂点では粘液と汗に濡れまみれたレオタードに貼り付いてくっきりとその姿を現す乳首が完全勃起していた。そこを見逃すようでは淫魔ではない。

ザラザラした猫舌に更に大きな粒を混ぜ込んだような触手の先端が挟み込むようにしてコリコリと扱き上げてくる。

「かふっっっっ!!! んんむぅぅんっっっっ……!!」

乳頭で耐えがたいほどの痺れが炸裂し、乳芯に甘い衝撃を伝

えてくる。クキクキ。コキコキとまるでレバーでも操作するように上下左右に折り曲げられれば、痺れは倍増して壮絶なまでの乳悦を伝えてくる。

さらに表面に生えたザラザラを活かすようにしごかれれば、殆どボディペイント同然の極薄スーツはその刺激を全く緩和することなく勃起しきった乳首に伝えてくる。まるで無数の歯に甘噛みされるような圧迫感と擦過感に心臓が止まりそうなほどの快感が押しよせてきた。

(だめっ……ここで負けたら、ゼロの肉奴隷にされる……!)

瑠璃はありったけの精神力と魔力を動員してナイフの柄をを握りしめ、更に土手っ腹奥深くにねじり込む。

「ぐっ!!! そうだ、そうこなくちゃいけないよ。簡単に屈服してしまうようじゃ面白みがないからね。……なあ、こんなに密着してるんだ、親愛の証にキスなんてどうだい?」

「何をふざけたことを――っ!?」

その言葉が終わるやいなや、ゼロは自らの『伸ばした』のだ。そのくちはまるで酸素マスク状にになっており、瑠璃の顔面に近づくとカポッと口と鼻をふさいでしまう。

「や、やめ、離れなさい……うっっっ!!!??」

触手の管で繋がっているゼロの口から吐息が吐き出された。それはやたら甘い香りがし。一息吸うだけで胸の奥がかぁっと熱くなる。

(媚薬ガス――っ!! く、だめ、今は引きはがせない……!)

今ナイフから魔力を送るのを止めればもっと好き放題されるのは目に見えている。ガスの吸うのを承知の上で呼吸せざるを得なかった。

「こひゅーっっ!! こひゅーっっ!! う、うぅく……!」

吸い込む度に肺から血液に取り込まれて。体中が燃え上がるように火照っていく。汗そのものが催淫効果を持ったようで、肌が敏感になっていくのがわかった。

汗をたっぷり吸ったスーツが地肌に擦れる度にピリピリと甘い痺れが全身から押しよせてくる。

それはおへその下の機関、子宮に集約されて級きゅんと切なく疼いてしまうのだ。膣はすでにうねって愛液をはなちはじめ、ほころび始めた陰唇からこぼれだしてスーツに舟型のいやらしい染みを作り出している。

「もうこんなにぐっしょり濡れているじゃないか……いけない娘だ……戦闘中だというのかわかっているのかな?」

そういうとゼロは股間から触手を伸ばし、スーツにペットリ貼り付いて透けてしまっている女陰に縁に触れた。

「はぅぅぅっっっっ!!!」

腰にビリビリッと電流が走る。快美な感電に思わず腰が砕けそうになった。そのまま布越しにラヴィアをなぞるように擦り立ててくる。

魔力防壁すら無効化する魔液を女陰に塗りたくられたのでは溜まった物では無かった。あっという間に股間が煮えたぎるような灼熱の熱さに包まれ、甘い淫熱に焼き焦がされそうになる。

「もう溜まらないんじゃないかい? ここに――おまんこにぶち込んでほしいんじゃないのかい?」

「ふざける……なっ……! 私はそんな淫らな女じゃ、ないっ

……！」

そういいながらナイフを抉る。快感に身体が流されそうになっているのは事実だった。だが相手も弱っているはず。ここが勝負所だと信じて獲物を握りしめる。

「ぐっっっっ!!!　くふぅ……。強情な牝にはこれが一番効くんだよ」

そう言いながらラヴィアをなぞっていた触手が膣口にあてがわれ、レオタードごと浅く中へと入り込んでくる。

「はうぅうううっっっっっっっっ!!!」

膣襞が硬柔らかく、熱い肉触手に穿たれて猛烈な悦楽を呼び覚ました。膣道は反射的に収縮し、侵入者の形を確かめるかのように喰い絞める。

「使い古された言葉ですが、『強気な娘にはアナルが効く』んですよ」

そう言いながら別の肉棒触手が尻たぶを割り，肛門括約筋の締め付けをこじ開けて腸内に入り込んできた。

「あ――――っっっっっっっっっ!?!?」

お尻からわき起こる焼け付くような感触。脳みそに一瞬桃色の稲妻が炸裂し、身体がギクッと反り返った。

「ほら、ほら、キクでしょう?」

そういいながら浅く膣とアナルに抜いては差し込み、抜いては差し込みの連打を繰り返す。

いつしか陰唇からはスーツからしみ出るほどの愛液がこぼれだし、尻穴からは腸液がまるで粗そうでもしたかのようにスーツに染みを作っていく。

「うぉっっっっっ!!!　おっっっ　おっっっっ、おっっっっ!!!!」

(だめぇぇぇぇぇっっっっっっ!!　耐えなきゃ、だめなのにぃぃ、魔力が……身体が……集中できないぃぃぃっ!!!)

「もうイキたいでしょう?　これだけボクの息を吸って汁をすりつけられてるんだ。これだけ我慢しただけでも賞賛に値するよ。もう我慢しなくて良いんだよ?」

「いやっっいやいやいやっっっっっ!!!　わらしぃ、まけないぃぃぃぃぃぃぃぃっっっっっ!!」

「そうかい、ならこっちはこっちで勝手にやらしてもらうよ!

そう、れっ!!」

その言葉を合図に、三本の太い触手が膣内に、別の太い触手がアナルを一気に奥で貫いた。

ジュルルルルルッッッ、ズボボォォォォッッッッ!!!

「ひはぁっっっ!?　ひっぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ!!!!」

一気に子宮まで、そして結腸まで貫き通された瞬間股間から爆発的な快感が炸裂した。それは全身隅々までくまなく行き渡り、意識を完全に粉砕する。

もう魔力を流し込むどころか、ナイフを握る事すら出来なかった。身体が反射的に背骨も折れよとばかりにのけぞり返り、舌を突き出して壮絶な絶頂感に悶絶する。

股間からぶじゃぁぁっっと大量の愛液がはなたれ、さらにプシップシッと潮が吹き上がる。

「ボクの勝ちみたいだね。これで君はボクの物だ……!」

絶頂の海をたゆたう少女魔術師にはその声は聞こえていなかった――。

囚われの身となった瑠璃が受けたのは徹底的な肉体改造だった。ゼロ曰く『立派な愛液供給奴隷になるにはまず身体から変えないとね』だそうだ。そんな高位淫魔に連れてこられたのはバイオラボの研究室の一室であった。そこはすでに辺り一面触手に覆われ、すでにゼロの領域と化しているようだった。

（何をされようとも屈しない……！魔力と精神力の限りを尽くしてして耐え抜いてやる……！　誰が愛液供給肉奴隷なんかになるもんですか！）

人間の世界とは思えぬ猪飼に連れてこられた少女はそれでも闘志を燃やし、抵抗を誓う。

そんな触手部屋の真ん中はまるで浴室のようにくぼんでおり、肉の埋め込み式バスタブの中にはなみなみと得体の知れない液体が注ぎ込まれていた。

「さあ、お風呂の時間だよ」

瑠璃は無造作にその中に放り込まれた。

ザバーン！

「くあああああああああああっっっっっ!?　あ、あつぅううううううっっっっっ!!!」

まず感じたのは猛烈な熱さであった。全身を業火で焼かれるような猛烈な夏が全身を包んだ。

案の定魔力防護を施したスーツは全く防御効果を発揮せずまるで何もないかのようにしみ通ってくる。こうなれば身体にピッタリ貼り付いた魔力防護レオタードスーツもただの競泳水着と大差ない。

毛穴という毛穴から入り込んでくる液体は当然と言えば当然のように強力な媚薬効果を持っているようで、あっという間に全身に淫熱を植え付けてくる。体中がどうしようもないほど疼き火照って、触手のバスタブの中で思わず縛められた身体を淫らにくねらせ、腰を突き出してしまう。

皮膚どころか神経すら犯す媚毒は瑠璃の身体を淫らに作り替えていく。肌が異様なまでに敏感になり、ぐっしょり濡れたレオタードとタイツが豊満な乳房は言うに及ばず、お腹、股間、内股、そしてつま先にまで擦れる感触だけで軽い絶頂感を覚えてしまうほどにされてしまった。

「あっふ……んく……んぉおお……！」

（だめ、魔力の全てを防壁に回して……！）

魔力行使のために精神集中を行おうとする少女魔術師の行動を阻止するかのようにバスタブの周りで蠢いていた触手達が動いた。

先端に注射針のような鋭い肉鍼を持った触手が胸に近づく。そして両乳房の頂点でしこり立っている乳首の先端にレオタードを貫いて射し込まれたのだ。

「ひぎぃっっっっっ!?　ぎひぃいいいっっっっっっっ!!!」

媚毒は麻酔効果も持ち合わせているのか、痛みは全くなかった。乳腺の切れ込みから入り込んできた触手鍼は深々と乳房を穿った。そして、胸の中に液体を注入してくる。

ぷちゅっ！　ちゅうううう……!!!

「おおぁぁぁぁぁっ……お、おっぱいに、何か、入れられてる……！　やめ、やめろぉぉぉぉぉ……！」

胸の中に注射された液体は今瑠璃がつけられている媚毒液と

同等かそれ以上に強力な物らしく、あっという間に胸が焼き焦がされそうな、それでいて甘く蕩ける様な乳悦に満たされる。
液体のせいかどうかはわからないが、乳房がぐんっと一回り大きく膨れあがり、満々と張り詰めてワンサイズほどはアップする。
ただでさえツンとそそり立っていたロケットおっぱいが更に大きくなったのだから感度もアップする。
更に感じやすくなった乳房にたっぷりと淫毒を染みこませたバスタオルのような触手がギュッと巻き付いた。
「あひぃいいいいいいいいい!? お、おっぱい、おっぱい弾けっっっるうぅっっ!!!」
つぶつぶのたっぷり生えた軟らかい肉に乳肌をレオタード越しに舐られると、まさに乳房が破裂しそうなほどの悦びが弾けた。そのまま淫液を普段は隠れている下乳にまで丹念に擦り込む様に揉み込まれると、それだけで心臓が止まりそうなほどの悦感が迸って少女魔術師の脳裏に桃色のスパークが走る。
股間からはプシッ、プシッと白く濁った本気の愛液がレオタードなど無いかのように勢いよく媚毒液の中に放たれ、混ざり合ってゆく。
そんな股間にも触手は殺到した。幾本もの触手が愛理の膣内に潜り込み、媚肉をメチャクチャにかき混ぜていく。もちろん媚毒粘液を塗り込めながらだ。
「んひぃいいいいいいいいいいい!!! ふぉおおおおおおおっっっっっっ!!! くっひぃいいいいいいいいいい――――んんんっっっっっ!!!」
膣襞を一枚一枚扱られるたびに一つの絶頂に達してしまう。螺旋を描くように絡み合った触手に襞の一枚一枚野間にまで媚毒をたっぷり塗り込められ、数え切れないほどの絶頂に吹き飛ばされてしまう。イク度に膣の感度が上昇しているようで、反射的に触手を喰い絞める肉壺がフル稼働中の溶鉱炉とかす。
ぎっちり触手をくわえ込んでしまったが為に肉縄の形状や熱さまでもがはっきりと感じ取れてしまった。
(だめぇぇぇっっっ……! イクのは、だめぇぇっっ!! 耐えて、魔力を、練らなくちゃいけないの、にぃいいっっ)
魔力防壁を張らねば肉体改造はどんどん進んでしまう。わかっているのだが抵抗することなど出来なかった。
そうこうしている間に触手達は固い肉の門をこじ開けて子宮内部にまで入り込んできていた。本当なら快感を含めた感覚を感じる器官ではないそこを、徹底的に作り替えていく。
まるでペンキでも塗るかのように小さなローラー型の触手が高速で回転しながら媚毒液を子宮内壁に塗り込んでくる。
「うひぃいいいいいいいいっっっっっ!?!? お、おにゃかの内側ぁぁぁぁっっっっっ、しゃぶられてりゅううううっっっ!?」
しかもそれは絶大な快感を伴っていた。子を産むための神聖な器官が敏感過ぎる快感受容器官へと変貌させられていく。
さらにタオルのような触手が子袋を押し広げるかのようにごしごしと内側からお腹をさすってくる。レオタード越しにお腹がプチッと膨れあがり、触手の形が見えた。
「あ――――っっっっっっ!!!そこらめぇぇぇっっっっ!!! 大事

なところ、らめぇぇぇぇっっっ!!!」

子宮は女としてのみならず丹田と言って魔力の中心となる大事な器官である。そこを犯されているのだから瑠璃は気も狂わんばかりに叫んだ。

しかしそんな少女魔術師にはお構いなく、今度はアナルに無数の触手が潜り込んでくる。

「あぐううううううううっっっっ!!!」

なんどやられても慣れない肛門性交にうめき声を漏らす。肛門がめくり返され、腸襞が擦り立てられる。たっぷりと媚毒液を塗り込まれながら抉り込まれると、腰骨の辺りからずぅんとした重々しい快美感がわき起こって背骨を駆け抜け脳天を直撃する。

「やめてぇぇぇぇぇっっ、あうぐぅぅぅっっ!!! お尻の穴、こわさ、ないでぇぇぇえっぁぁぁあんんんっっっっっっ!!!」

肛門が触手によって肛門括約筋が切れる直前まで拡張されると、腸内にどっと媚毒液が入り込んでくる。それによってなお一層敏感になり。アナルセックスはもちろん腸絶頂まで味わえるような身体に変えられてしまう。もう尻穴を弾かれる刺激と腸内抉りに酔って百度は超える絶頂に押し上げられてしまった。

さらに触手バスタブは全身くまなく瑠璃の肉を淫らに変化させていく。

ナイフを握り、魔術印を刻むための青色に染め上げられた手袋に包まれた十指にすらまでも触手は巻き付き、丹念に媚毒を塗り込んでくる。闘うための指が、淫らな器官に変貌していく。

すぐに指は乳首やクリトリスと同等の敏感さになり、根元からブルーの手袋ごとぎちゅっとしごかれる度に腕が指が解けて淫蜜に変わってしまいそうなほどの快感を感受してしまう。

足指もそうだった。地面からマナを効率よく取得するために地下足袋状になっている漆黒のブーツは、きゅっと丸まる足指にネットリと絡みつき、媚毒を擦り込んでいく。指はもちろん、足の裏にまでたっぷりと塗り込められて、足裏全体がジンジンと痺れる様な疼きに覆われる。

(ても……あしも、なんてぇぇぇえっ……!)

まさに全身が作り替えられている——。その恐怖に魂が震えた。

(こんなおまんこもお尻の穴もおっぱいもぉぉぉ……っ。全身えっちにされちゃったら……イキっぱなしで精神集中なんてできないよぉぉぉっっっ……!)

魔力で抵抗することが出来ない少女魔術師の身体は、すでに三千倍以上は常より感度が増している。もう何をされてもイきっぱなしだった。

それでも精神が壊れず、未だ

(でもいやぁぁぁぁっっっっ! 負けるのだけは、いやぁぁぁぁ!!!)

抵抗の心を残しているのは魔術の心得と並々ならぬ精神力有ってこそだ。

しかしこの淫獄風呂が終わるのは何時なのか——。ゼロは未だ姿を見せない。

どれだけ時間がたったのかもわからない。意識は半ば絶頂の中に解け、精神はほころびかけていた。
「……。……。」
（誰……わらしを呼ぶの……）
ザバァっと淫毒湯船から引きずり出される。そのまま右足首を触手で絡め取られ、宙づりにされた。濡れた黒髪や青色の手袋に包まれた指先からぽたぽたと媚毒液をしたたらせながら、研究所の薄明かりに照らされた瑠璃の姿は何とも扇情的である。
肉体も多少変化が見られるようで、元々大きかったロケットおっぱいはすでに砲弾巨乳と化してワンサイズはおろかツーサイズはアップして、満々と張り詰めている。先端でビンビンにしこり立った乳首は小指の先ほどまでの大きさになって、周囲の乳暈もろとも膨れあがり今にもレオタードを突き破りそうだ。
股間は触手に穿たれてめり込んだレオタードがまだ戻っておらず、ガッポリと空洞を開けている。アナルも同じ有様だ。
闘うために引き締められていた手足の筋肉は淫らに変貌させられてたっぷりと脂の乗った男好きのするむっちりした感じになってしまっていた。
「やあやあ長い間ご苦労様だったね。どうだい、三日三晩レインボーの原液に浸けられた感想は？　夢見心地だったろう？」
「……最悪の……あぅ……気分よ……。私の身体をこんなにして……。必ず報いは……あはぁ……くれてやるんだから……！」
そう言うと精一杯の精神力を動員してゼロをにらみつける。
「おお怖い怖い。全身の感度を内から外から三千倍以上にされてもまだそんな口がきけるとは、流石政府のエージェント様だね。……どれだけ高純度な愛液が搾り取れるのか、今から楽しみだよ。おいで」
ゼロの合図と共に室内にのっそりと巨大な生物が入ってきた。格好は大型のナメクジといったところだ。しかし全身から触手を生やしているのが淫魔の眷族であることを示している。大きさは研究室の天井に届くほどだ。
「なに……こいつ……」
本能的な恐怖感が身体を震わせる。
「こいつが君の愛液を余すところなく吸い取ってくれる淫魔獣さ。もちろん、吸い取るときに極上の快感を与えてくれることは約束するよ。さあ、早速だけど味合わせてもらおうかな」
その言葉ともににナメクジの口のような部分がぐばぁっと大きく拡がった。中は暗くてよく見えないが、どうやら無数の触手の束のような物で構成されているらしい。
瑠璃はつり上げられたまま、淫魔獣の大きく開いた口元に運び出す。そしてだらんとぶら下がった両手から巨大淫魔の内部へとゆっくりと取り込まれていった。
「ひぃぃぃぃぃっっっっっ!!　いやっっっっっ!!!　いやぁぁぁぁぁっっっっ!!!」
身体をもがかせて暴れるが抵抗にもならない。青と紫を基調とした魔術礼装に包まれた全身が頭から、そして胴体、両脚と徐々に飲み込まれていく。

淫魔獣の体内は狭く、異様な熱気に包まれていた。狭い肉洞に全身が圧迫され、敏感にされた肉体が悦びの電流を流し込んでくる。

「おぅぁっっっ、うぶぅっっっ、んぎっっっ!!!!　き、きつすぎ、るぅ……!!!!」

身体が押し潰されそうな強烈な圧迫に瑠璃は身悶えすることも出来ない。立派に育った豊乳が肉壁にぐにゃりと押し潰されて、乳首がコリコリと押し揉まれる。

「おっふ！　おふぅぅぅぅっっっっっっっ!!!!　はうぉおおおおおおっっっっっっ!!!」

胸だけでぜっちょに達した瑠璃は股間からぶしゅっと愛液を噴いた。

その股間めがけて新たな陵辱者が現れる。敏感になった黒タイツに包まれた足に身をこすりつけながら割入り、大きく股を広げさせる巨大な存在が現れたのだ。

股を割るほどに巨大な存在はようやく閉じ始めていた陰唇にぴとりと密着した。

(!?!?　、ま、まさか、これ、ものすごくおっきな、触手……！)

そのまさかであった。もし下腹部を見ることが出来たなら、瑠璃の胴回りを少し細身にした程度の太さはあるであろう巨大な肉触手が見えたはずだ。そしてその超極太肉棒はらせん状に深い溝が刻まれており、まるで果汁絞り器を連想させる。もっとも、絞るのは果汁ではなくて滋養に満ちた愛液だが。

そんな巨大肉棒が回転しながら瑠璃の膣内にレオタード事押し入ってきた。

「おっほ、おおおおおおおおぅぅぅぅぅぅぅっっっっ!!!!　わたしのおまんこ、こわれちゃうぅぅぅぅっっっっっ!!!!　あっっがあああああ、あぎいいいいっっっっっ!!!1」

極太触手は情け容赦なく陰唇を裂ける直前まで拡張し、膣口を限界寸前にまで押し広げた。これで性器が壊れないのは肉体改造のなせる技か。

一ミリの隙間もなく膣肉に密着した肉棒は、幹に刻まれた螺旋で肉襞を苛烈にえぐり取ってくる。それだけではなく、回転して吸い付いてくる襞をねじ切らんがばかりにねじ回すのだ。股間から爆裂的な悦感が炸裂し、溜まらず瑠璃は目をグリンと剥いて絶頂した。

股間から大量の愛液と潮がブシッと噴きだしていく。

更に極太肉棒は子宮口をこじ開け、立派な性感『層』と化した子宮内へと潜り込んできた。

薄紫のレオタードに包まれた腹部が極太肉棒型にボゴォッと大きく膨らんだ。

敏感過ぎるほど敏感になった子宮を肉詰めにされ、ジューサーのような触手で抉られると、暴力的なまでの快感と絶頂の嵐が子宮から産まれて全身を包み込んだ。

「おごおおおおおおお

壁も同調して滑った肉粘膜全体で魔力のたっぷり詰まった蜜をしゃぶり取っていく。

さらに大量に蜜を吸収するために、極太触手は瑠璃の体内に入ったまま無数の口を開かせた。一つ一つが人間の唇のように大きくぽってりとした肉口が襞に強烈な吸引を掛ける。

ぢゅるるるるるぅううううう――っっっっ!!!

「ひあああああああああああああああ!!!! 吸われてるっ！ いや、吸わないで、私のお汁吸っちゃらめぇぇぇえ!!!」

「おお……凄い愛液だ……これならものすごい高純度のレインボーが作れそうだ。さあ、もっとその愛液をボクに提供しておくれ……！」

ゼロの意を受けた淫魔獣は身体の中に細かな触手を生み出した。

それは陰唇の頂点でビンビンにそそり立っている快感神経の詰まった肉豆、クリトリスに群がっていく。四方八方から舐めしゃぶり、突き、ねじり上げを繰り返してくる。

「ひぉぅっっっっっっっっっっっっ!!!!! あがあああああああああああっっっっっっっっっっっ!!!!! がっっっっっっっひぃぅううううおおおおおおおおおお!!!!」

股間から爆弾が破裂したかのような凄まじい快感が生まれ、恐ろしいまでの絶頂感が脳みそを焼き尽くす。脳裏で極彩色の花火が何発も何発も打ち上がっては弾けた。頭は我知らずのうちに肉壁にこすりつけるようにブンブンと振りたくられ、理知的な印象を与えていたメガネがずり落ちる。

舌を突き出し、喉が破れんばかりに悦びを訴えた。

瑠璃の尽きることのない無尽蔵の魔力はまだまだ濃密な愛液を提供し続ける。それはこの淫獄が終わることが無いことも示しているのだ。

彼女の意識が超絶的な快楽に壊れるが先か、それとも魔力すら維持できなくなって死を迎えるのが先か――誰にもわからない。

この地獄のような快楽が少女エージェントが任務に失敗対価だとしたら、あまりにも淫惨過ぎた――。

内閣府特殊生物災害対策室のエージェントとして淫魔研究の疑いのある『村井重化学工業』の内偵調査のために三ヶ月前から学生研究員として桃ノ木愛理（もものきあいり）は入り込んでいた。

今時刻は午前23時。でっち上げた偽の残業でこんな時刻だ。人目が少なくなった今がチャンスだ。とっくに終わっていた作業のデータをバレないようスクリプトを組んだ『まだやっているように見せかけるダミー』に切り替えると、別の作業に取りかかる。胸の谷間から一本のＵＳＢメモリを取り出した。外部記憶媒体の持ち込み、持ち出しが厳重なこの研究所でこれ一本持ち込むのもなかなか至難の業だったが、訓練を積んだプロである彼女にとっては不可能なことではない。

それを差し込むと、防衛省サイバー自衛隊の開発したクラッキングツールが立ち上がる。これによって愛理の権限ではとても参照できない高度な機密ファイルの存在が浮き彫りになる。更に見るのには苦労が行ったが、数週間前に抜き出しておいた柳主任のセキュリティコードを使うことでこれも突破できた。目の前にずらっと並ぶ機密情報の数々。多くは特許、財務、だが中にひときわ堅固なセキュリティのかけられたファイルがあった。

（さてさて……？）

しかしこれも自衛隊謹製のツールと愛理のテクニックで難なく突破。奥の門は開いた。そこに開示されたのは恐るべき研究の内容であった。

（……淫魔兵器……!?　淫魔に電子頭脳を組み込んでコントロールし、生体兵器として利用する……。なるほど、これは大物）

少し興奮した愛理は更に解析を進める。

（淫魔の生物的生命力と科学、化学兵器を合体させ、高度なＡＩで自律した戦闘兵器に仕立て上げる、もちろん命令の受諾も可能……なるほど実現すれば対淫魔戦闘も世界のミリタリーバランスも変わる。出来れば……の話）

正直なところ淫魔の生体は殆ど未知数に近い。各研究所が全力を挙げて調査研究に当たっているがわかったことはほんのわずかに過ぎない。

（あまりにも危険な研究だ……。明後日実戦テストが行われる、か。それはぜひ拝見したい物）

抜き取ったデータをメモリーに納めると、侵入の痕跡を一切残さずに全てをシャットダウンする。足跡が付くようなへまはしていないはずだ。ＵＳＢメモリーを抜き取ると、胸の間に納めた。

（全ては明後日……）

愛理はにやりと不敵な笑みを浮かべた。

三日後、実戦テスト当日。愛理は全身を黒の光沢を持ったラバー地のスーツに包んでいた。彼女のグラマラスなボディラインが丸見えだ。腰には様々な電子機器や装備が取り付けられたベルトを巻いていた。それ以外は殆どボディペイントのようだ。

実験が行われるのは榊バイオテクノロジー研究棟物理衝撃試験室だ。試験室は一つの大きな体育館ほどの大きさはあり、実験を眺めるためのガラス張りの付きだした部屋がある。まずそこへ向かう。闇に紛れて音も立てずに目的の箇所へ到着した愛理は、ドアの向こう、室内に五、六人の気配を感じ取る。

（まあ、実験が成功した良い夢でも見るんだな……）

そう心の中でつぶやくと愛理は装備品の中から無力化ガスを隙間から流し込んだ。しばらく中でうめき声が聞こえていたが、やがて静かになる。物音がしなくなったことを確かめると、愛理は首輪からコードを引き抜いてドアの電子ロック装置にクラッキングを掛けて、強制解錠する。ガスはすでに効力が切れており、愛理が入っても大丈夫だ。中には白衣姿の初老の研究員や背広を着たおそらくは『デモンストレーション』を見に来たのであろう男達がそこかしこに倒れていた。

「では、特等席で観戦と行きましょうかね……」

そうつぶやいた愛理は窓際の堰にもたれかかるように意識を失っている男をどかすと、窓に張り付いた。

『実験を開始します』

コンソールからオペレーターの声が流れてくる。

それと同時にドアが開いた。『愛理の入ってきた』ドアが。
「!?」
素早く振り返るとそこには得体の知れない生命体が立っていた。大きさは愛理の二倍以上、高めの天井すれすれまで身長がある。全身はメタリックな装甲に覆われており、顔も仮面のような物をかぶっている。しかし継ぎ目から中身が見て取れた。腐ったどす黒い肉のような物がみっちり詰まっている。筋繊維のように細い肉が束になっていたり、丸々太い肉の所もある。そして何よりもこの怪物の正体を雄弁にかたるのは背中から伸びてくる無数の触手であった。吸盤の付いたたこのような触手、イボが無数に付いた棍棒のような物、はたまた軟性メタルで覆われたうねり狂うドリルのような触手。
「淫魔兵器……!」
愛理はぎりっと奥歯を噛んだ。
【そのとおりだよ、政府の牝犬君】
「!?」
オンになりっぱなしのコンソールから声が聞こえてくる。どこか機械音声じみた声だ。
「誰だ!」
【誰だ、はないだろう。こっちから見れば君の方が侵入者だ。だがまあ、名乗るなら『ゼロ』とでも言っておこうか】
「ゼロ……!」
愛理は内心で驚愕した。様々な人間と淫魔が組んだ淫魔犯罪に荷担している、各治安組織でもトップクラスの最重要指名手配人物だ。
「この研究も貴様がそそのかしたの?」
そういうとクツクツと笑い声が聞こえてきた。
【そそのかした、とはいってほしくないねえ。私は人間達の求めに応じて材料を提供しているだけさ。人間の欲にはキリが無い。こちらも良い稼ぎになっているよ】
「だまれ! 人の心の隙間につけ込み欲望を煽るその手管、知らないとでも思っているの……!」
【私につけ込まれるのも人間が欲深いからさ。今回の件に関しても淫魔兵器を作って軍事シェアのトップに立ちたいという欲望有ったからだ。私はそれにちょっと協力しただけ】
「くだらないご託はたくさん! 姿を見せたらどう!」
再びクツクツという笑い声が聞こえ、
【今日の所は遠慮しておくよ、お客さんも大勢招待しているしね。別の場所から君とそいつ、ああ、『Λ』っていうんだがね、そいつは、そいつとの実戦テストを拝見させてもらうとするよ。さあ、やれ、Λ】
ゼロの声と同時に、Λは触腕を伸ばした。
「くっ!?」
すかさず腕をクロスしてガードするが、受けきれない。吹っ飛ばされて背面の効果窓ガラスをぶち破りながら物理実験室へ突き落とされた。
「ぐっ!」
体中がバラバラになるような痛みが走る。かなり野高所からの落下だったが受け身には成功してそれまでのダメージではなかったが、触腕で殴られた腕の骨が折れそうな程に痛んだ。
割れた窓からΛが飛び降りてくる。ずしん、途実験室の頑丈な床に着地した怪物はフシューと不気味な息を吐いて身構え、触手をうねらせる。
「やるしか、ないようね」
そういうと愛理は腰に着けた装備ベルトを引きちぎった。
「錬成!」
そう一声高く叫ぶと、霊力を変換して両手に小さなブロックを積むようにして巨大なガントレットを生み出された。両手にすぽっとはまり、二の腕までもガードする。そして足や腰にも同じようなレガースが生み出された。見た目は銀のような鈍い光沢を放っており、明らかに固そうなのだが。指先はワキワキと動きグーパーを繰り返しているところを見ると銀でも鉄でもない何か未知の金属に思われる。

これこそが桃ノ木愛理の必殺技、錬金武装であった。霊力を錬金術の触媒として武装化する高度な術だ。

愛理は両手に握り拳を作るとと胸の前でガツンと打ち合わせた。

「……いきます」

触手兵に搭載されている戦闘ＡＩは相当高度な物らしくまるで疾風のように少女エージェントの背後を取ると触腕で背後から羽交い締めにしてしまう。高度な戦闘訓練を受けた彼女の目でさえ追いつけなかった。

「はなしなさい……！」

だが一度捕らえた獲物を放すような甘いプログラミングは当然の如くされていない。触手兵の顔面に着けられたフェイスマスクのスリットが少し開く。そしてそこからフシュウ……と息を吹きかけた。

「うっ……」

その息は目に見えるほどの濃い桃色をした霧であった。戦闘で疲労し、荒い息をしていた愛理はうかつにもそれを胸一杯に吸い込んでしまう。当然媚薬作用を持っているであろう気体を……。

果たしてその効果は覿面だった。

「はっ……あっ……うっ……!!」

まず吸い込んだ喉がかぁっと暑く火照り、肺がまるで火事場の空気でも吸い込んだかのようにかぁっと熱く火照り始めた。その熱は淫気を取り入れた血流に乗って全身を駆け巡り、あっという間に全身がサウナ風呂にいるかのようにゆであげる。心臓は戦闘をしていたときよりもなお酷く高鳴り、今にも張り裂けんがばかりに鼓動を繰り返している。体中の汗腺が開き、ぶわっと玉のような汗がにじみ出してスーツに吸い取られていった。

「うぅ……う、うっ……！」

息を止めなくては、そう思うのだがもう荒くなった呼吸を止めることは出来ない。更に濃厚な媚毒ガスを吸い込んでしまい、今度は全身の感触が鋭敏になり始めた。普段なら気にすることもないスーツと地肌が触れる感触でさえもが気になり、汗でペットリ張り付いた布地が肌を擦る刺激でさえもが大きな舌に舐めしゃぶられているかのような感覚を伝えてくる。しかもそれは決して不快な物では無い。どこか甘く、じんわりとした心地よさを身体の芯に送り込んでくるのだ。その感触に身じろぎすると更に肌と布が激しく擦れ、全身がネットリ愛撫されているような気分になってくる。

「うっ……く……そ……」

たわわに実っている乳房は興奮のあまり張りつめ初め、ただでさえの巨乳が更に大きく膨らみ上がる。その頂点で誰にも触れられていないのに硬くしこり立ち始めた乳首と、その周りで膨らむ乳輪が漆黒のスーツ越しにくっきりと浮き上がった。乳腺の切れ込みまで見えるほどのは利付きと完全勃起だ。それはもうひとつの肉豆クリトリスにも同様であった。皮から完全に剥け、勃起して布越しにその存在を主張している。

そのしたの肉割れはぽってりと膨らんで花開き、奥からとろりと蜜をこぼして戦闘衣装に舟型の染みを作っていた。

「くはっ……はー、はぁぁぁ……！」

（ダメ……息、止められない……どんどん私の身体、敏感になっちゃう……！）

まだ触手一本触れていないというのに愛理の身体は完全に出来上がりかけていた。

そんな愛理についに本格的な責めが始まる。背後から触手と言うよりはコードと呼んだ方がふさわしいような物が生えてきた。その先端には除細動器に使う様な四角形のパッドが取り付けられていた。それらが、ぺたりぺたりと愛理の乳房に張り付いていく。

「んっ！　くっ、ううっ！　な、なに……？」

両乳房の上半分と下半分に丁寧に三枚ずつ貼られていく。張り付いた瞬間は冷やっとした感触が走ったが、すぐに体温に暖められて気にならなくなった。

ここからが機械と融合した『新世代の淫魔』の責めの始まりであった。パッドに電流が流されたのである。

ヴァチヴァチヴァチィっっ!!

「ひぐっ!!　んぐぁあああ!!」

強烈な突き刺すような刺激が乳房全体に降り注ぎ、思わず拘束された身体をのけぞりかえらせてしまう。一瞬感じたのは痛みであったが。すぐにそれは甘い痛痒感に変わった。乳芯が痺れる様な強烈な甘痒さに愛理は身を揉んだ。更に追撃の電流が流れてくる。今度はパッドとスーツの間から蒼白いスパークが見えるほど強力な電流だ。

ビリヴァチヴァチヴァチ!!

「ぎゃぅんっっっ!!!」

声がひっくり返るような悲鳴が喉から迸る。乳房に流された電流は通常の電気とは違うらしく。確実に愛理の性感を刺激してきた。まるで乳房の真意直接電流を流され、快感神経の束を刺激されているかのようで乳房が気持ち良くてたまらない。

さらに電撃が断続的に右、左、右、左を順序立てて流し込まれてきた。

「ひみゃっ!!　ひんぐぅっっ!!!　んぉぉおっっっ、んっひぃいいいっっ!!」

その度に生体電流に直接介入する淫電流は的確に乳房全体を快楽の稲妻で焼き焦がし、トロトロに溶かしていく。スパークが炸裂する度に乳房の中の快感神経が強烈に刺激されて上下に胸が勝手に跳ね上がってしまう。誰の手に揉まれているわけでもないのに揉みしだかれているかのようであった。

電撃は止むことを知らない。今度はランダムに電流を送り込み。右ばっかりかと思えばいきなり左。という変則的な責めを加えてくる。

「あっひ!!　あひぃ!!　おごぉっ!!」

(む、むね……おかしくなる……！　へんだ……！　焼けるよう……！)

対象が刺激に慣れてしまわないようにする丁寧な配慮に身構えることも出来ず、予想外の電撃に乳房を甘く焼かれてその度に頤をそらしてのけぞりかえらせてしまう。身体全体もビクンビクンと大きく動いてしまい。その度にたわわな乳房がブルンブルンと上下に揺れた。

幾度となく電撃を喰らった乳房は今や熱せられた溶鉱炉のような状態で、快美の熱がドロドロに溜まって中で渦巻いている。気持ち良くて溜まらず、もし両腕が自由なら自分で揉みしだいてしまったかもしれない。

股間からは更に愛蜜が量を増し、スーツの給水容量を超えた分が糸を引きながらつつーぅっと垂れ落ち始めていた。愛理の身体が弾ける度に振りまかれる仄香る甘酸っぱい汗と相まって、周囲に熱気と淫らな臭いが充満していく。

淫気が満ち始めた実験室内で触手兵の責めは更に加速していく。今度はビンビンに勃起した乳首と乳輪にパッドが取り付けられたのだ。

(い、いまそこ、電気ビリビリされたらぁ……！)

胸でさえもあれだけの快感刺激なのに、極点である乳首にまで刺激を加えられたら溜まらない。何とか振り落とそうと身をもがかせるが、乳首の形がわかるほどにピッタリ張り付いたパッドは外れる気配を見せない。そうこうしているうちに、とうとう肉豆めがけて快感の電流が降り注いだ。

ビバヴァヴァヴァ

「あっひいいいいいいいいいい!!!!　んほぉおおおおおっっっっ!!!　ぐひ、ぎひぃいいいいっっっっ!!」

完全に準備完了とみたか、触手兵の股間部の装甲が開かれた。そこから伸びてくる触手もまた、メタリックで鉄のように見えるが自由にうねり狂う半淫半機の肉縄であった。太さはおおよそ愛理の太股ほど。先端部はなんとドリル状になっており、怪しげな粘液を吹き散らしながらぎゅるるっと回転していた。

それがすでにぱっくり花開いて膣口まで透けさせているスーツの股間部にあてがわれ、布ごとごりゅっと強引に肉割れを押し開けて入り込んできた。

「んひぃいいいいいいいいい!!!!」

それだけで愛理は絶頂に押し込まれた。回転するドリルは肉襞を強烈に擦過し、肉粘膜を目茶苦茶にかき回す。あまりの太さに一ミリの隙も無く密着したメタル触手は襞の一枚一枚まで掘り返すような勢いで膣内で回った。

一回転する度に無数の襞が抉り返され、その度に絶頂級の強烈な快感が送り込まれてくる。

(たえええええっっっ……耐えるの……!!　愛理……耐える……!!)

歯を食いしばって必死に甲斐からの奔流に流されまいとする少女エージェントであったが、嵐の前の小舟のようにその抵抗ははかなかった。

やがてドリル触手は子宮口をこじ開け、普段なら入り事が出来るはずもない子宮までズンと貫き通す。

「かはぁ……!!!」

スーツ越しのお腹が触手型にボコォッと膨らんだ。

重々しい衝撃と子宮内を回転体で擦り抉られるあり得ない刺激の前に、愛理は歯を食いしばってイクのを耐えようとするがどうしても絶頂に送り込まれてしまう。

はかない抵抗を嘲笑うかのように、新たな責め手が現れた。電気パッドが膨らんだお腹。つまり子宮の上に貼り付けられたのである。そして、情け容赦なく電流を流し込んでくる。

「おっごぉおおおおおおんんんん!!!!」

辺りがまばゆくなるほどの強烈なスパークを起こした電極パッドは愛理の子宮を焼き尽くした。肉体を改造するような電撃に子宮内壁は一瞬で性感帯に作り替えられ、ドリル触手の感触をより鋭敏に、そしてはっきりと感じ取ることが出来るようになった。

その後も断続的に電撃を落とされながら子宮をほじくり返され、愛理は数え切れないほどの絶頂に送り込まれる。ポルチオ絶頂とはまたひと味違った未知の快感なすすべなど無い。

しかしそれだけでは許さじとばかりに今度は一本のホース状の触手が伸びてきた。先端は尖った針のような形をしており、その脇にも二本丸っこいロッドが伸びている。

その触手は極太にほじくり返されている肉穴の上で切なげに震えている豆、クリトリスに向かって伸びていった。そして針がブスリと完全勃起した肉豆に突き刺さった。

「ひおぅっ!!!　ひぎゃぅんんんんっっっっっっっ!!!!」

痛みはなかった。しかしこの触手の恐ろしさはそこにあるのではない。神経をクラッキングして直接快感経路に強制的な快感を流し込んできたのだ。それを敏感過ぎる快感神経の束であるクリトリスでやられたのだから溜まらなかった。

「ひがぁぁあああああああっっっっっ!!!　おっごおおおおおおおお!!!!　んぎゃぅううううっっっっ!!!」

(おまめっ……はじけっ……!　おっぱいも、おまんこも、全部、痺れてきもちよひゅぎる……っ!)

淫魔兵はプログラミングされた指令と本能にしたがってただひたすら愛理の全身を責めまくる。必死に歯を食いしばる愛理だったが敗戦は濃厚であった。

百回目か、二百回目か、もう数えることなど出来ぬほど絶頂に送り込まれ

た愛理の意識はとうとう真っ白にホワイトアウトした。股間からじょろろろ……と尿がこぼれだし、愛理の全身から力が抜ける。それでも時折壊れた人形のようにビクンビクンと跳ね返ってはいたが。メガネの下の目は完全に白目を剥いている。

しかしそれでもプログラムされた動きを止めない触手兵。命令しか受け付けないマシンの恐ろしさであった。

【よし、Λ。マシンモード停止。】

ゼロからの命令があってようやく触手兵は愛理を放した。

「あぅぐぅ……」

うめき声を上げながら自分の作った愛液と尿の池に顔面から突っ込んで倒れ伏す。全身はビクビクと震え、一切力が入らなかった。もう立つとも出来ない。

(くひょぉ……くやしい……!)

機械と融合した新たな淫魔とはいえここまで怪異に好きなようにされたのは初めてだ。屈辱に脳が沸騰しそうになる。

(チャンスさえ……　あれば……こんな奴……)

二度目があれば必ず勝てる。そう思う愛理ではあったが、相手ははセカンドチャンスを与えるつもりなど内容だった。

【どうだったね？　ハイテクを駆使した新世代の淫魔とのセックスは。私にもわからないが最高だったようじゃないか。実験はまずまず成功という所だろうな】

「ふざけ……るな……。私はまだ……屈服して……ない……!」

そう自分に言い聞かせるように言い放った愛理は自らの体液で汚れた身体を起こし、無理矢理両脚に力を入れて立ち上がり、構えを取った。しかし足は生まれ立ての子鹿のように震え、ガントレットに包まれた握り拳も弱々しく、戦える状態でないのは明白だった。

だが心は折れていない。退魔のエージェントとしての使命感が屈服を許さない。なんとしてでもこの淫魔兵の情報を生きて持って帰らねばならない。そのためにはさらなる陵辱をも耐え抜く……!

しかしそんな健気抵抗でも淫魔にとっては絶望へ至らしめる最高のスパイスだ。機械越しの音声でも喜色を隠しきれない様子で命令する。

【結構結構。まだそれだけの覇気が有れば、次のモードにも耐えられるだろうな……？　Λ、『淫魔モード』】

ゼロがコマンドを入力すると、触手兵は新たな形態を取り始めた。体中に貼り付けられていた装甲が中に圧縮されていたらしい何らかの気体をブシューと放出しつつ大きく隙間を拡げ始めたのだ。メタリックな装甲板に隠されていた体表面があらわになる。

それは殆ど触手の束で構成されており、肉体と言えるような箇所はかなり少ないようだった。これでは打撃技は殆ど通用しまい。銃弾の効き目だって怪しいだろう。それでもフェイスプレートだけは外さないのは一応『兵』としての体面を保つためか。

(こんなのじゃ……分が悪すぎる……)

今の自分が戦える状態ではないことをさっ引いても打撃技主体の愛理では勝ち目は薄かったかも知れない。それでも退魔エージェントはファイティングポーズを取った。

(なら打撃の効きそうな顔面を……!)

あれだけ連続で絶頂させられていたのが嘘のようなキレでフリッカーを放つ。しかしいくら常人離れした愛理の精神力に支えられたそれとはいえ、完全な状態の攻撃とはほど遠かった。案の定触手兵の頭は首も触手なのか、ぐにゃりとあり得ない方向へ曲がってやすやすとかわしてしまう。

「くっ……!」

それでも諦めず、スーツが身体をしゃぶる感触で軽い絶頂に導かれそうになりながらも攻撃を止めない。そんな哀れな戦士に引導を渡すべく触手兵が動いた。足の触手を十本ほど床すれすれに鞭打つように放ち、愛理の足をしばき上げたのだ。

ビシィッ!

「あぅっ!!」

よけることもかなわず、愛理の錬金術で作られたレガースに包まれた足にクリーンヒットした。両脚をなぎ払われるようにはたかれ、思わず尻餅をつくようにして転倒してしまう。そのまま無数の触手が防護鎧に絡みつき、両脚を大きく広げさせてしまった。

「くっ……また……しても……!」

また犯される――。そう悟った愛理はガントレットに包まれた両手で必死に触手を引きはがそうとするが無駄な努力だった。

そうこうしているうちに殆ど触手体となった触手兵が肉縄の束となって愛理に迫った。軟体となった身体を活かして床を這うように高速で襲いかかったΛは、身体の大部分をあっさりと戦闘少女の下、彼女をまたがらせるようにして潜り込んできてしまう。

「うっ、うぅ……!」

お尻に当たるヌメヌメした硬柔らかい感触に思わず顔をしかめる。

改めて触手兵は太い肉縄でレガースごと愛理の足を巻きしめると、大きくM字開脚を強いた。陵辱の余韻さめやらぬ股間は戦闘中にも漏らしていた愛液のせいで女陰がくっきりと透けてしまっている。陰唇の膨らみ具合から膣口の収縮具合まで、まるでボディペイントかと言わんばかりにあらわになっていた。

そこに触手兵のおそらくは股間から伸びてきたのであろう触手が愛理を突き上げるようにしてあてがわれた。反射的に下半身を見やると、今度はいかにも生物っぽい物が底にはあった。

形状は男性器によく似ているのだが、カリ首が十段以上はある。そして表面はうっすらと甲殻類の様にエナメル質の何かでコーティングされており、ある程度のの堅さを持つことが想像できる。太さは先ほどの機械ドリル触手に劣らないほどの極太で、愛理の太股ぐらいはあるのではないだろうか。長さは予想も付かない。

「う……」

愛理はゴクリと生唾を飲んだ。あんな物で犯されたら、またよがり狂ってしまう――!

(ダメ、耐えるの、愛理。ここで負けることだけは、避けるの……!)

ギュッと唇を噛み、体中を強ばらせて挿入に備える。

かたくなに抵抗を続けるエージェントを突き崩すべく、触手は蠢いた。その巨体からは想像も付かぬほどのスピードで一気に陰唇を割り、膣口を限界まで押し広げ、膣襞を無数のカリ首で掻き擦りながら子宮口をぶち破り子宮内部まで貫き通す。

メリメリメリィッッ、ズズンンッッッ!!!

「かっは……! お、おぉおおおおぅうううううっっっっっ!!!」

骨盤が砕けてしまうのではないかという衝撃と共に、愛理の身体が一瞬ふわっと浮いて再び沈み込んだ。体中がバラバラになりそうなほどの強烈な快感衝撃が全身を走り抜け、有無を言わせずエージェント少女を絶頂へと突き上げてしまう。満々と膨らみきった豊乳が振動に揺さぶられてタプンと大きく上下に揺さぶられた。

そして極太肉触手は本格的に愛理を堕としにかかる。

子宮まで貫いた極太触手を目にも止まらぬ早さで引き抜いていく。

ズルルルルルゥッ!

「ひぎゅうううううううっっっっっっ!!! し、子宮ひきじゅりだしゃれるぅうううっっっっ!?!?」

何十段もの巨大でエラの張ったカリ首に子宮の内側を引っかかれ、内臓期間ごと引きずり出されるのでは無いかと言うほどの衝撃が走った。しかしそれが溜まらないほど気持ち良い。エラが子宮口に引っかかる度にゴツゴツと固い肉の輪を弾かれてお腹の中がビリビリ痺れる様な強烈な愉悦感が走り抜ける。それはあっという間に全身へと周り、脳天を真っ白に蕩けさせた。ガントレットに包まれ両手が不規則にグーパーを繰り返し、タイツに包まれた両脚指がレガースの底を掻く。

入り口付近まで引き抜かれた極太肉棒は先端まで引き抜かれる直前に再び

猛烈な突き上げを繰り出してきた。膣襞という膣襞が多数の雁に掻き毟られ――ドズンッッッッ!!!」

「おぅぁ!!!　あぐあああああああああああ!!!」

再び子宮まで貫かれた。お腹がボコリと盛り上がり、スーツ越しに触手の形が見て取れる。愛理の身体はけん玉のように又しても宙に浮き、股間へと戻っていく。

(こっれ……だめ、だめぇぇぇぇっっ)

全身の骨がバラバラになりそうなほどの衝撃が襲う。しかしそれは一瞬で快感の音叉を叩いたような気持ち良すぎる振動に早変わりし、頭のてっぺんから足のつま先まで余すところなく絶頂快美感が送り込まれてくるのだ。

股間からぶしゅっ、ぶしゅっと愛液が飛沫上がり、時には潮ではないかという物まで吹き上がる。

だが触手の責めはこれからが本番だった。

人間けん玉が高速で繰り返されたのである。

ジュルズルズウルッッ、ドズンッッッ!!　ヌボボボボボッッ、ガヅン!!

「あっがぁぁぁぁぁ!!!!　おご、おごぉぉぅぉぉぅぅぉぉお!!!」

愛理の身体が何度も何度も飛んだ。その度に肉襞は凶悪な雁の数々に掻き毟られて、それだけで絶頂刷るほどの猛烈な痺れを送り込んでくる。これの繰り返しも地味ながらかなり愛理を追い込み、肉壺がまるで灼熱の溶鉱炉のように熱く煮えたぎった。それは彼女自身の淫熱だけではない。生物肉棒だけが持ちうる生の熱さも伝わってきていた。

一撃食らう毎に灼熱の大杭を撃ち込まれているようで、全身に炎が回ったかのように熱くなる。もちろんそれは甘い媚熱で、体中が蕩けそうなほど気持ち良いのだ。

それぞれが一度や二度の絶頂では済まないほどの強烈な刺激なのに、それが複合して、何度も何度も休むことなく繰り返される。

「おごぉおおおおおおおおおおおおっっっっっっっ!!!　おぉあああああ!!!　んぎっひぃいいい

「ひっっっっっぐぅうううううううっっっっ!?!?　やら、やめれぇえええええつつつつっ!!!」

おそらくは媚薬成分を持っているのであろうスライムはスーツ越しに肌に染みこむと、猛烈な灼熱感を起こした。腕が甘く焼け、スライムは更に先へ先へと進んでくる。ギュッと作られていた握り拳の指の中にまで入り込んでくる。そしてぬっちゃぬっちゃと越しを扱き立て始めたのだ。

「にゃいいいいいいいいっっっっっっ!!!!　にゃに、にゃにこぉれへぇえええっぇえええええ!?!?」

指を舐めしゃぶられるという奇妙な愉悦が指先から腕に掛けてじんわり駆け上ってくる。両手合わせて十本の指がまるでかたくなに閉じられた指を解きほぐすかのように優しくマッサージされた。

「んひぃいいいいいいいいいっっっっっ……ゆび、ゆびらめぇっ、そこ、たたかうためのゆびなのにぃいいっっっっっ!!!　んむぅうううううううっっっっっ!!!!　ゆび、かえられていっぢゃぅううううううっっっっっっっ!!!」

ぐっちゃぐっちゃと指を愛撫されると今まで知らなかった快美感に身が震える。もはや戦闘態勢を取ることなど出来ず、握るような開くような力ない中途半端な姿勢しか取ることを許されない。

「んっっっっごおおおおおおおおおおぉぉぉぉんんんんん!!!!　体中どこでもイクぅうううううううっっっっ!!!　イカされるううううう!!!」

【そろそろ限界のようだな、Λ、とどめを刺してやれ】

ゼロの非常な声が響く。

その声に合わせて触手兵は動きを止めた。

「はへ……？」

子宮奥までを貫いていた極太肉触手が引きずり出されていく。自らの粘液と愛理の愛液にまみれた肉棒はようやくキツすぎる穴の中から抜けていった。

「はぁあぁあぁあっっっ……はーーーー……。はぁあぁあぁあっっっっ、はぁあぁあぁ……」

ようやく絶頂地獄から一時解放された愛理は大きく荒い息をついた。しかしその息も絶頂の余韻は隠せておらず、どこか熱く湿って艶めいた響きを持っている。

身体や乳首を拘束していた触手も一旦その位置を離れ、少女エージェントの身体は完全に解放された。しかし、もう立ち上がるほどの余力すらも残されていない。

（こんなやつ……絶対に倒さなくちゃいけない……のに……）

こんな物が量産され。もしテロリストの手のにでも渡ったら世の女性は安心して暮らすことも出来ないだろう。それを阻止するためにはなんとしてもこの触手兵の情報を持ち帰り、計画を阻止するための大規模な捜査活動を行わなければならない。

だが愛理が情報を持ち帰らねばそれも出来ない。

（だから……今は……耐える……の……。絶対……屈しちゃ……だめ……）

少女スパイの情報で救われるであろう何千人もの女性のことを思うと、ここでくじけるわけにはいかないという思いが新たにこみ上げてくる。

だが、ゼロとその手先の淫魔兵は愛理を完全に堕とし尽くすべく新たな動きを始めた。

すっかり脱力した愛理の背後に回り、足の間に触手を入れ大きく持ち上げたのだ。

「あっ、あうぅ！」

触手兵の胸元近くまで引き上げられ、股間は股関節が外れるのでは無いかと言うほどのM字開脚。まるで小児におしっこをさせるときのような恥辱のポーズで固定されてしまった。

足が全開脚になっているので隠さねばならないところがはっきり見える。これほどの陵辱を受けても破れなかったスーツは子宮口近くまでめり込んで、未だ閉じない膣口と陰唇の姿を透けさせながらぽっかりと大きな穴を開

けていた。のぞき込めば子宮まで見えてしまいそうだ。奥からは止めどなく愛液があふれ出し、すでに愛理の淫液まみれの床に更にぼたぼたとしたたり落ちていく。

その上で息づいているクリトリスは完全に勃起しきって指の先ほどの大きさになり、これまで淫液で濡れたスーツがペットリ張り付いてその姿をあらわにさせていた。

【この触手兵の凄いところはね、半淫半機、どちらの形態も取れ、そして同時に動かせる所なんだ。人間の英知の結晶と淫魔の技の両立……素晴らしいことだと思わないか？】

「ふざけ……るな……！　こんな悪魔みたいな兵器……絶対に許せない……！」

スーツに肌をしゃぶられる度にイってしまいそうになる肉体を叱咤し、必死に目尻をつり上げてそう言い放つ。

【おやおや、あれだけやられたのにまだそれだけの元気があるとはねぇ。正直驚きだよ。しかしデモンストレーションとしてはもう十分なほど皆様にお見せできた。ここは君の完全屈服を持ってショーを幕引きとしよう。Λ、やれ】

その言葉を合図に触手兵の身体にまとわりついていた装甲がまるで液体状になり、股間へと集中した。そして新たなメタルの触手となる。

「……ひっ……！」

今までさんざん犯されてきた愛理ではあったがその逸物には息をのんだ。太さは今まで以上で、もう彼女の頭より大きいのでは無いかと言うほどに太い。幹の部分にはドリルのような深い溝が幾本も刻まれていた。全体は砲弾型に盛りあがっている。そして、それはギュルルルル……と回転している。それはもはや触手と言うより肉の掘削機とでも呼んだ方がよい代物だ。

それがぽっかりと空いたままの愛理の陰唇に近づいていく。

「や、やめっ、やめ……！」

何とか挿入を避けようと身じろぎするが、無駄な努力に過ぎなかった。とうとうメタルドリルは先端が膣口内部に入り込んでいく。

ギュリュギュリュッリュンギチュルルルル!!!

「はぁおおお

かと思うと、再び子宮奥めがけて猛烈な勢いで貫き通していく。その度に凄まじいほどの悦感衝撃波が炸裂し、体中を悦楽で埋め尽くしていってしまう。尋常ではないほどの数絶頂の高みに押し上げられ、脳裏で極彩色の花火が何発も炸裂する。まぶたの裏ではピンク色のスパークが何度も何度もわき起こり、目は殆ど白目を剥きそうになっている。

突き上げられる度に縦横無尽に揺さぶられる乳房。その頂点で破裂せんがばかりに勃起している乳首を触手が捕らえた。先ほどの吸盤触手がキュプっと左乳首を飲み込み、再び強制的に上に向けて砲弾型になるまで引っ張り上げてくる。そして右胸は繊毛が無数に生えたカーペットのような触手に暴れ回る肉鞠の根元からギュムッとまきしめられ、とぐろを巻くようにして先端の乳首までをも締め上げる。

「おうううううううううううううううううっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっふううううううううううううううううううううううっっっっっっっっっっ!!!!! んごぉっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっっ!!!! ぎゃひぃいいい

こぉおおおおおおおおっ!?!?」

異様な感触に思わず声をうわずらせる愛理であったが、触手の行動を押しとどめることなど出来ない。カリを無数に備えた肉縄は肛門括約筋のキツい抵抗をやすやすと押しのけて直腸内部へと押し入ってきた。

「おおおおおおおおお

の方から全て抜け出ていった。
　ターゲットを殲滅した触手兵はもう興味は無い、といわんばかりに精液で池が出来て居る床に愛理の身体を無造作に放り投げた。
　どべぢゃぁっ……。
「ぐべぇぇぇぇぇ……。ふひぃぃぃぃっっっっっっ……ひはぁぁあああああっっ……！」
　白目を剥いて白濁の池に沈み痙攣することしか出来ない愛理。そこにゼロの声が降りかかった。
【正直ここまで耐えるとは予想外だったよ。よく頑張った君にご褒美をあげよう。触手兵だがね、すでに人間と協力して量産体制に入っているよ。機械側のデータについては君の健闘を祝して詳細を上げようじゃないか。もっとも淫魔部分はこの私にしか作れないから対処のしようも無いだろうがね。もっとも、君がここから歩いて出て行ければの話だがね。それでは、また機会があったらあおう。はーっはっはっはははは……】
（ぜ……ろ……！　あなただけは……かならず……！）
　汚濁にまみれた敗残の少女エージェントはその名を深く刻み込み、ようやく許された一時の休憩に意識を沈ませていった――。

「安らかにお休みなさいっ背教の徒！　エイメンっ！」
内閣府特殊生物災害対策室のエージェントでありながら神に仕えるシスターでもある高坂真利愛は叫びながら両手に持った銃を乱射した。
全く狙っていないように見えてその実射撃は正確で、一発毎に雑魚淫魔が倒れていく。
「おーほほほ！　神の御許に送って差し上げますわ一！」
少なからずトリガーハッピーである彼女はとにかく銃を連射した。弾の消費も早い。あっという間に弾薬が尽きた。
「ちっ！　銃がなくても拳がありましてよ！」
弾の切れた銃を放り捨てた真利愛は黒手袋に包まれた手につけた十字架の刻印入り聖なるナックルで淫魔を撲殺し続ける。しかしそれにも限界はあった。
「はぁはぁ……何匹沸いて出てきますの⁉」
倒しても倒して沸いて出てくる。流石のエージェントシスターにも疲れが見え始めた。その好きを見逃す淫魔ではない。素早く触手を放ち腕を絡め取ってしまう。
「あう！」
一度動きを封じてしまえば後はなし崩しだった。両腕に触手が絡み、両脚にも巻き付く。そして異形の者達の知能は無いが異様な馬鹿力で持って宙づりに吊されるようにして拘束されてしまった。
漆黒と濃紺で彩られた戦闘用修道服に包まれたシスターの豊満な肢体が揺れる。
今までさんざん銃で撃たれたお返しとばかりに、淫魔達は白濁弾を放ち始めた。びゅぷっ、びゅぷぷっ、どぴゅっ‼
「あぅっ！　あっ、あぁっ‼　穢らわしいっ！」
媚薬効果を含んだ白濁粘液弾が体中に降り注ぎ、あっという間にエージェントシスターの身体を白くネットリと染めていく。神聖なる加護が施された戦闘修道服だったがその効果も無く媚毒の効果は布を抜けて肌に染み渡ってきた。やがて体中の感覚が敏感になり、粘液弾でたわわに実った乳房をびちゃっと打擲されると、それだけで軽い絶頂に達してしまう。
更にその粘液を良くまぶそうと乳房に触手が絡みついてくる、根元からぶら下がる乳房に汚濁液を擦り込む様に揉み込まれればこらえがたい疼きが乳悦となって真利愛の身体を責さいなむ。
股間は黒のホットパンツ状のパンツに包まれていたが、そこにじんわりと淫らな染みができはじめていた。それを見逃す淫魔達ではない。無数の同胞を殺された偉業の者達は仕返しとばかりに異様な触手を生み出した。巨大な漏斗状になっている触手である。その先端部を真利愛の陰唇を割り、膣内を貫通し子宮にまで突き刺してくる。そしてその漏斗にびちゃびちゃと媚毒白濁液を溜め始めたではないか。自然、濃厚な催淫効果を持った液体が子宮に流れ込んでくることになる。
「うあっっっっあああ……熱い、ですわぁ……！くぅぅ……！」
子宮から膣までを強烈な毒に冒されて真利愛の身体が官能の炎に包まれる。白濁粘液弾に身体を撃たれる度に絶頂し、愛液を噴き出してしまう。
だが真利愛の淫獄はまだ序章に過ぎなかった。

真利愛は今度は皮肉にも肉で出来た十字架に罪人のように磔にされた。そして淫魔に逆らった咎人を処刑するのは肉の槍。シスターの胴回りほどはあろうかという触手がホットパンツごとシスターエージェントの陰唇に突き込まれた。

「あひぃいいいぃぃぁぉおおおおおっっっっっ!!!!」

常人なら避けて壊れるほどの極太を子宮までねじ込まれる。感じたのはわずかな苦痛と絶大な快楽。

膣が極太肉触手に擦り上げられ、媚毒精液で性感帯に変貌させられた子宮を突き上げられると下腹部から爆発的な快美感が押しよせてきた。

嵐のような快楽の前に真利愛はなすすべも無く絶頂してしまう。一度の挿入で何十回、もの絶頂に突き上げられ、シスターの脳裏で真っ白なスパークが炸裂した。

それを何度も何度も繰り返される。子宮脱しそうな勢いで極太が引き抜かれたかと思うと、雷光の如く素早い動きでまた一気に膣をこそげ取りながら子宮奥までぶち抜かれる。

「あおおおおおおおっっっっ!!!! わ、わたくしのアソコこわれてしまいますわぁぁぁぁっっっっ!!! あ、赤ちゃんの所そんなに突かないでくださいましぃぃぃっっっっっおおおおおお!!!!」

真利愛は黒髪を振り乱して何度も何度も絶頂し、磔刑に処された身体を目一杯のけぞり返らせた。

股間からは滝のようにドバドバと白く濁った本気の愛液がこぼれだして垂れ落ちてゆく。

しかし淫処刑はまだまだこれからが本番であった。

黒いボディスーツに包まれた豊満な乳房に触手がぐるぐる巻きに絡みつく。とぐろを巻くようにして肉丘を這い上ると先端で勃起している乳首に、ワニ口クリップのような物でカプリと噛みついたのである。

「ひぎっ!? そ、そんな乱暴なぁぁぁっ」

層声を上げる真利愛であったが、痛みよりは乳豆を噛み潰される鋭い快楽の方が強かった。

そして、それにプラスするようになんと触手の先端から電流が流し込まれたのである。

ヴァチヴァチヴァチウヴァチビビビビッッッ!!

「ひっ!!!!! ひきゃうぅうううううううううっっっっっっっ!!!! 乳首焼け……ひぎゃあああああああ!!!!!」

淫靡な高圧電流は対象を感電死させるでも無く神経に直接流し込まれ、快感を司るところにだけ巧妙に作用した。

乳房が焼け焦げるように熱く燃え上がり、乳悦は心臓を貫いて全身へと行き渡る。

更に股間では陰唇の上の方でぷっくり膨らんで自己主張を始めていたクリトリスにも鰐口クリップが噛みついていた。そして、乳首と同時に淫電流を流し込む。

「ひぉおおおおおおお

よい愛液を大量に出すと言うことで、真利愛は高位淫魔『ゼロ』に献上されるべく彼らの巣へとお持ち帰りされた。

もちろん引き渡されるまただ黙って拘束されるだけなわけもなく、おぞましいまでの淫拘束がシスターを待ち受けていた。

そこはとある研究所の一室だったが、素手辺り一面には触手はビッシリはわされており、そこがすでに魔界に堕ちている事を示していた。

その部屋の肉壁に両腕を大きく横に拡げさせられ、両脚も股関節が外れてしまうのでは無いかというぐらいに大きく開脚させられた上で埋め込まれた。形としては宙で『土』の字を描くような格好である。

「くっ……こんな格好……！」

おおよそ人間としての尊厳を全て否定するかのような屈辱的な格好である。愛液を垂れ流すだけの肉奴隷で良い。そういった宣言で有るようにも思えた。

そしてそれに沿うように、先ほどの磔処刑触手に負けず劣らずの超極太肉触手が真利愛の股にねじ込まれていた。膣口はぺったんこになるまで押し広げられて拡張され、子宮は限界まで拡がって本来なら子を宿すはずの箇所を肉詰めにされている。

先ほどまでの肉槍と違ったのはこれが高速でピストン運動を仕掛けてくることであった。子宮が外に出てしまうのではないかというほど子宮口をひっかきながら外に出ると、また暴走したトラックの勢いで子宮の多くに激突する。

「おうううううううっっっっっ!!!　んごぉおおおおおっっっ!!!!　んふぉおおおおおおお!!!!」

その度に戦闘修道服に覆われた腹部が胸元まで盛り上がった。

両手両足が完全固定されているため衝撃が一切逃げない。骨盤を砕かれんがばかりの衝撃が腰骨に走り、それは甘美すぎる痺れとなって全身を震えさせる。

股間から愛液をどばぁっと垂れ流して絶頂するしかない。

股間の超極太触手は高速ピストン十回に一回は大量の射精を行った。もちろん超強力な媚毒性分の精液である。それが腹の中、子宮が破裂寸前の水風船になるまで膨れあがってお腹が異様な膨れあがり方を見せるまで注ぎ込まれているのだ。子宮から濃厚な淫毒が体内に取り込まれ。全身の感度が百倍、二百倍と倍々ゲームで上がっていく。

更にアナルにも巨大な触手がぶち込まれていた。こいつは射精するだけではなく、直腸を越えて結腸、小腸、大腸から胃までを媚毒で汚染しつつ食道を駆け上り、口から体内を貫通して飛び出してしまっていた。

(ぜ、全身どころか身体の内まで穢されてぇぇえっっ、神よ、神よぉぉぉっ、わたくしを、お救いくださいませぇぇぇっ)

しかし彼女の信じる神は無慈悲で、淫獄は果てなく続く。

シスター真利愛は数千度目の絶頂に身を震わせながら届かぬ祈りを繰り返した――。

政府の求めに応じて深山から降り、エージェントとなった退魔の巫女御門静音。その初戦となるべき戦いは生物ラボで発生した淫魔ハザードの対処であった。淫魔化した馬や牛があふれる研究所に単身織り込んでいく。静音も神道退魔流の術を尽くして闘ったがまだ実戦経験の薄い巫女にとっては荷が重すぎる任務であった。

闘いやすいよう身体に密着するよう改造された純白と漆黒で彩られた改造巫女装束ごと淫裂を濡れてもいないのに淫魔馬の超極太で触手でぶち抜かれた。

「んおおおおおおっっ!!」

しかし静音の纏う神気でも中和できない淫気のおかげで感じたのは痛みではなくて壮絶な快楽でった。腹をスーツごと突き上げられる度に壮絶な快感が全身をバラバラに粉砕するほどの勢いで駆け抜けていく。更に媚毒射精まで喰らって胎内をパンパンにされて絶頂する。退魔エージェントの巫女は完全に敗北した――

馬淫魔に犯され抜いて戦闘能力を失った巫女エージェントの次なる相手は、淫魔化した牛であった。その体躯は異様なまでに巨大で、一軒家の屋根程までは身長がある。

触手逸物も股それに似合った超極太で、静音の胴体ほどはあろうかという大きさであった。

触手で細い胴を鷲づかみにし、その超弩級極太触手を無理矢理小さなおまんこに埋め込んでいく。その様はまるでオナホールを使っているようであった。

「おごぉおおおお――っっっっ゛゛さっけ、さけるぅぅっっ゛゛　儂の身体真っ二つになるぅぅうっっっ゛゛」

そして身体ごと上下に揺すぶられる。その度に極太逸物が腹を突き破らんがばかりに子宮内壁を押し上げ、漆黒の巫女スーツごとお腹が胸元まで突き上げられる。

そんな責めでも感じてしまい、おぞましい淫拷問絶頂に身を震わす。巫女少女の初陣は陰惨な結果に終わろうとしていた。

身体に貼り付き豊満なボディラインを露わにする漆黒のライダースーツに身を包んだ黒髪の美女エージェント、朱鷺羽瑞穂。彼女は愛車の大型バイクを駆って各所に同時発生した淫魔を退治していたが、ふとした油断から濃厚な淫気にまとわりつかれ愛車が淫魔とかしてしまった。触手と化したバイクのタイヤが乳首にはまり、勃起を強制してくる。まもなく乳突起はビンビンにそそり立ち、淫液にまみれたタイヤで乳首をなぞられる感触だけで絶頂するほどになる。

さらに股間には大型のスパイクタイヤを思わせるようなタイヤ触手がぶち込まれていた。膣内を高速回転で抉りながら。子宮内部をも擦り上げる。

「あおおおおっっっ三　おおおっっ三」

成熟した大人の女性だけが持つ濃密な色気を振りまき、黒髪を振り乱してイキまくる瑞穂。歴戦のエージェントである彼女であっても耐えがたいほどの壮絶な快美感と絶頂の前に、なすすべも無くメスに変えられていた。

完全にグロッキーになった瑞穂はもう淫魔バイクの思うがままだ。ライダースーツの美女エージェントはバイクの座面に跨がらされた。シートにはピストンを模したような彼女の頭ほどはある超極太触手が生えており、当然それを飲み込まされるハメになった。形状通り強烈なピストンで子宮を抉られ、背も折れよと身体をのけぞらせて発情汗を振りまきながら絶頂する瑞穂。

淫魔バイクはなんとそのまま荒れた路面を走行しだしたのである。

「んひっっ ⁝⁝ ひぃぃぃっっっ ⁝⁝」

右に左に車体が傾き、段差を乗り上げたりする度に膣や子宮の思いも掛けないところが抉られてその度に予測できない絶頂が襲いかかってくる。

かといってこの高速で走っている淫魔バイクから振り落とされては死は免れまい。滑稽だとわかっていてもハンドルを握らざるを得なかった。死の恐怖と隣り合わせに送り込まれてくる快美感は股格別で、ダメだとわかっていても絶頂してしまう。淫らなツーリングは燃料が尽きるまで続く——。

淫魔と人間の間に産まれた数奇な宿命を持った少女、それが榊百合亜（さかきゆりあ）だった。彼女は生まれ落ちたときより特殊な能力を授かってい。念動力。サイコキネシスとも呼ばれる力である。彼女の力を欲した政府は彼女を監視下に置き、内閣府特殊生物災害対策室のエージェントとして採用した。以来彼女は愛用のゴシックロリータ様式の密着スーツに身を包み、特殊能力を持って淫魔と戦い続けていた。

そして今日の相手は全身が粘体で覆われたスライムであった。淫魔を研究しているとある生物実験室から抜け出し、淫気を吸って巨大化した物らしい。なるほどその大きさはやや小柄な百合亜の身体を丸ごと飲み込めるほどであった。

「……気色悪い……。早く死ね……」

百合亜は得意のサイコキネシスで武器としている鋼鉄の礫を弾丸として高速で発射する戦法で闘ったが、属性が悪かった。コアの部分を狙えば良いとわかっているのだが、粘度の高い体表面に飲み込まれて届かないのだ。

「くっ……弾が通じない……これじゃどうしようもない……」

そうこうしているうちにスライムの方が反撃に出た。まずは厄介な手を潰さんとばかりに粘塊を両手に向かって投げつけたのだ。びちゃっ、びちゃあ！　超能力を持つ以外には普通の少女に過ぎない百合亜にそれをかわすことは出来ず、紫の手袋に包まれた両手が粘塊に飲み込まれてしまった。

「うっく……あ、熱い……？」

スライムはそのものが高度に濃縮された媚毒で出来ているらしく、手袋にしみこんで皮膚に触れた瞬間強酸で焼かれたような刺激が走った。しかしそれは決して苦痛ではなく、未知の気持ちよさであるのが恐ろしかった。

スライムは手を包む粘塊の中で渦を発生させ。十指をネットリとマッサージしていく。

「うっう……あぁ……」

指先がどんどん敏感に、感じやすくなっていくのが自分でもわかった。生暖かい水流に舐られる度にゾクゾクするような心地よさが走る。全身の毛穴が開き、仄香る発情汗が噴き出してしまう。

さらにスライムは粘塊を手のように伸ばして、淫魔とのハーフのためか同年代の少女より相当にグラマラスで巨大な美爆乳をぎにゅっと揉み潰してきた。根元からくびり出され、ロケット状に絞り出される両胸。そこを媚薬の塊であるスライム触手に何度もこね回されるのだから溜まらなかった。ゴスロリレオタードのカップから乳肉がはみ出るほどに強く強くいじめられる。

「あっ……あぁぁ……っ……おっ……」

たちまち乳首は勃起して周囲の乳暈までぷっくり膨らんでしまう。ピッタリとボディペイントのように素肌に貼り付いたタイツのおかげでそれが丸見えだった。

股間もとろりと愛液をこぼし始めてしまう。それを敏感に感じ取ったスライムはねじった棒のようにした触手をバックから百合亜の淫裂に突き立てた。

「はぅん……!!　あっ、はぁぁぁ……！」

一気に子宮までをも貫いた触手は我が物顔で百合亜の胎内を蹂躙する。媚毒で出来たスライムは一突きで超能力エージェントを絶頂に導いてしまった。

「あぉおおおおお……くっ……、こんな程度で……私は……負けない……」

クールという韜晦の仮面をはぎ取るべくスライムは更に蠢く。

今度は体位を変え、スライムはウォーターベッドのように床に厚みを持って拡がった。その上にすっかり脱力した百合亜を乗せる。

「あっ……あああ……？」

するとズブズブとエナメルのゴシックブーツにつつまれた足がスライムの中に沈んでゆく。

結局空色のタイツとブーツに包まれたむっちりしたおみ足は大腿部まで飲み込まれてしまい、結果として百合亜はスライムの腹に跨がっているような格好になってしまった。

紫の手骸に包まれた両手もしっかり粘塊に取り込み、抵抗と能力を封じることも忘れない。このため腕は多少後ろに引っ張られる形になり、ロケット状に突きだした豊満すぎる爆乳は前方に突き出すような形になっている。

スライムが狙ったのはまずその爆乳だった。先ほどまでの媚毒スライム触手揉みですでに敏感になっているところに、スライムが渦巻きのような水流を作って両脇から挟み込むように揉みたててくる。

「ふあぁぁぁぁぁぁっっっっっ……!!!お、おっぱい、痺れる……!!!」まず感じたのは乳芯を激しく震わせる震動であった。快感神経の束を直接水流に抉られているかのような気持ちいい疼きが生まれ、全身を駆け抜けていく。

さらに押し潰すかのように両脇からぎゅううっと乳肌を圧迫され、無数の柔らかい丸ノコの刃のような物に連続で抉られれば指でムニムニと高速で押し込まれているような刺激が走る。

「あっあふ……んく……んおぉぉ……あぅぅ……！」

（きもち……いい……いけない……集中……できない……）

実際の所手は別にあってもなくても能力は使えるのだが精神力の集中が出来ないとコントロールが出来ない。乳悦に悶えっぱなしの今では無理な相談だった。

さらに巣霊夢の水流に弾かれてなお押し返すような弾力を見せる生意気おっぱい緒をいじめるべくさらにスライムが動く。

空色のタイツ越しにボディペイントかというほどにくっきり透けている大きめの乳首と乳暈。そこに丁度電動マッサージャーのヘッド部分のような円筒系の粘塊が乳暈と乳首を押し潰すかのように強く押し当てられる。そして見た目通りに高速振動を始めたのである。

ヴッ……ヴヴヴヴンン!!!

「ひっっっっあぁぁぁぁぁぁぁ!!!　ひぎっっっっっいぃぃぃぃぃ……っっっっっ!!!!」

完全に勃起して敏感過ぎるほど敏感になっていた乳首が高速振動で縦横無尽に震わせられまくる。乳首がもげてしまいそうな乱暴さだが、恐ろしいほどの悦感波動が乳首からわき起こる。乳暈まで丁寧に痺れ責めさせられるともう十度二十度と絶頂してしまって股間から愛液をプシプシと吹き出させてしまう。

その股間ももちろんスライム淫魔の魔の手の中にあった。百合亜が跨がっている座面に当たるところから大きなくびれを持った固く変形したスライムが伸びてくる。太さは少女の握り拳ほどはありそうだ。

それが一気に子宮まで貫いた。レオタード越しに腹がボコリと膨らむのが見える。太く、固い触手に膣襞と子宮内壁を抉られて百合亜はなすすべも無くまた一段高い絶頂に追い上げられていく。

「おはぁっぁぁんんっっ……!!!　ひぎぃぃいぅううううんんっっっっっ……!!!!!」

絶頂の海を漂う超能力美少女エージェント。そんな彼女をさらに辱めるべく、スライムは更に百合亜の身体を自分お腹へと取り込んでゆく。結局百合亜は完全に粘塊の中に沈む格好になってしまった。

口元部分だけはホースのような空洞があてがわれ呼吸だけは確保している。流石に殺す気までは無いようだったが、このまま絶頂地獄とさらなる責めが始まればどうなるかは怪しい物だった。

そしてスライムは手中にしたツインテール美少女を完全に堕とすべく蠢いた。膣内に埋め込みっぱなしの固い触手を一旦軟化させると、今度はまるで液体のようにじゅぼぼぼっと子宮内に入り込んできたのである。

「おぁあああああああああ……!!!　あがっっっっっっ……おぅぁぁぁぁぁぁ……！」

(お、おなかのなかぁぁぁぁ……満タンに……!!!)

子宮はあっという間にスライム詰めにされ子宮は限界まで内側から押し広げられた。百合亜のレオタードとタイツに包まれたおなかがまるで臨月の妊婦かと見まごうばかりに巨大に膨らむ。

更にその中にスライムのコアが無理矢理に挿入された。

ゴリ、ゴリリッッ!!!

「ひんぐぅぅぅぅぅっっっっっ……!!!

あが、んほっっっおおおおお……!!!!」

コアはまるで卵の如く固く、膣内を抉りGスポットを掻き擦って膣道を通過する度にあまりの快感美に目の前でまばゆいフラッシュがが何度も炸裂する。

さらにPスポットを刮げつつ子宮内部にゴリっと入れば、もう意識が吹き飛びそうなほどの爆裂的悦感が炸裂する。

それが更にアナルにまで行われた。腸襞が固い卵に削られる度に脳裏で花火が打ち上がる。スライムの中に濃厚な濁った愛液と腸液が浮かび、混ざり合っていく。

空気を入れて膨らませたような百合亜のお腹は前後からのスライム卵挿入によってデコボコと金平糖のようにいびつな形になっていた。

更にスライムに沈む興奮で更にワンサイズはアップした美巨乳に水流が絡みつく。根元からねじり上げるように右上、左上に引っ張り上げられ、乳房が根元からちぎられてしまいそうな感覚を覚える。しかしそんな軽い痛みでさえも今は快感のスパイスにしかならなかった。

乳房が荒っぽくねじ揉まれる度に乳芯をとろかすような甘い衝撃が迸り、乳芯をとろかして絶賛稼働中の溶鉱炉の鉄のように熱く説かしていく。

さらに乳首と乳暈までをも渦巻き水流に責め立てられれば稲妻のごとき鋭い快美果敢がわき起こって乳芯に突き刺さる。

それだけでは済まず、紫色の手袋に包まれた五指の一本一本までに水流が絡みつき、漆黒のエナメルブーツの中ではタイツに包まれた足指までもが丹念に愛撫を受けている。

「おぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅっっっっっ……!!!」

(能力……使えない……！　イク、イク、イク……！　イキっぱなしで、イキ死んじゃう……！)

超能力エージェントはスライムの中で泳ぐように悶えイキ続ける。それは彼女が死ぬか壊れるまで終わらないのだ――。

Staff

● Writer

高橋良喜

● Illustraitor(敬称略)

DON

masa

きづかかずき

スンダレぽん

トコビ

鈍色家電

●発行所

Palette Enterprise

HP　http://www.palette-e.com/

E-Mail　anq@palette-e.com

●印刷所

SUN GROUP

http://www.sungroup.co.jp/

2016 年 8 月 14 日：第一版

コミックマーケット 90

For Writers

●高橋良喜

　というわけで女スパイ、エージェント物でした。いいですね、女スパイ。永遠のロマンだと思います。本当はジョーカー・ゲームリスペクトなんでもっと渋井のやってみたかったような気もしますが私の能力ではここの変が限界です。というか実はもっと大量に文章書いてたんですけどページ数制約でなくなく切り捨てたり……。

　そんな苦労も詰まったこの本、楽しんで頂ければ幸いです。

　それではまた次回！

・本書は１８歳未満の方の閲覧をお断りしております。
・本書の内容はあらゆる犯罪行為を肯定、助長する物ではありません。本書に記されている内容を実行した場合、犯罪行為となる恐れがあります。
・本書の内容に関する権利は全て PaletteEnterprise が有しています。無許可での再配布（ネット上へのアップロード、対価を伴わない共有行為、交換行為を含みます）を禁じます。また、著作権法に定められた例外以外での複製は禁じます。該当事実を確認した場合、刑事法的処罰の請求、民事法的損害賠償の請求を行う可能性があります。
・落丁、乱丁については当サークルに在庫がある限り対応致しますが、在庫切れの際にはご容赦下さい。

Palette Enterprise.